

## 地上の楽園

人間はその長い歴史の中で、「不老長寿の国」「極楽浄土」「ユートピア」など名前はさまざまだが、地上に「楽園」を築こうとしてきた。それを実現するのが都市であるならば、それは楽園都市と呼ぶことができる。

都市は否応なくまわりの環境の影響を受ける。灼熱の地域では都市も暑く、乾燥した地域では都市もまた乾燥する。しかしその厳しい環境の中でも、都市は水や緑を配置し、すこしでも過ごしやすい環境を提供するために、さまざまな工夫がなされる。都市が住みやすい場所となれば、都市は賑わい、国が繁栄する。

そのような楽園都市は、多くはアイデアや計画、理想で終わっているのだが、1979年に世界遺産に登録されたイランの古都イスファハーンは実際に建造され、大いに賑わいを得た楽園都市の稀有な事例だ。なぜ、この地上の楽園は実現したのだろうか。

## イスファハーンの成り立ち

イスファハーンはテヘランの南約340km、イラン中央部のザグロス山脈東側に位置し、この山脈に源を發するザーヤンデルード川に沿って開けたオアシス都市である。川の名前は「命を与える川」という意味だ。

イランは国土のかなりの部分を山地と乾燥した高原地域が占める。そのため、水の存在は都市が成り立つための基本的な条件といわれる。ザーヤンデルード川は標高4,000mを越えるザグロス山脈の雪解け水を水源にしており、イランでは水量の豊富な川だ。しかしこの川でさえ、イスファハーンから100kmほど下流で砂漠地帯に流れこむと、水がなくなり途絶え、海まで届くことはない。

イスファハーンが都市として確立されるのはササン朝ペルシャ(3~7世紀)といわれ、軍営都市ジェイとユダヤ人の町ヤフーディアの二つの集落がこの地に建造された。さらに7世紀中ごろ、アラブ軍がこの地域を征服しミスル(駐屯地)を造営した。こうしてイスファハーンの都市基礎ができていった。8世紀後半には、イスラーム礼拝のための金曜モスクがヤフーディアに建造され、何度かの増改築を経て今日も同じ場所に現存する。10世紀以降は交易都市として発展したイスファハーンは、11世紀にはセルジューク朝ペルシャの首都となり、宮殿やマドラサ(学院)、バザール(常設市)が整備される。

しかし、イスファハーンを楽園都市として成り立たせたのは、さらに時代をくだった17世紀のことである。

## シャー・アッパース1世の夢

イスファハーンが本格的な都市改造をみるのは、16世紀末に始まるサファヴィー朝の時代である。1587~1629年を統治したシャー・アッパース1世は、即位以降、版図を拡大するとともに、1597年に首都をカズヴィーンからイスファハーンに移し、本格的にイスファハーンの都市建設に乗り出した。

王は金曜モスクとそれに続く古くからの道を残し、それに接するように幅170m、長さ500mの長方形の大広場を建造させた。これは「王の広場」と呼ばれ、北側の金曜モスクに繋がるバザールとの間にカイサリーヤ門を建造した。王の広場は祝典や市場の場所であり、またペルシャ発祥のポロ競技場としても使

FLAVOR OF CIVIL ENGINEERING INHERITANCE

# 土木遺産の香

## 第59回

# 砂漠に造られた楽園都市「イスファハーン」

(イラン・イスファハーン)



日本工営株式会社  
コンサルタント海外事業本部/開発事業部/事業部長代理  
**山田 耕治**  
YAMADA Koji

われた。

## 王のモスク

さらに1612年、王の広場に隣接して「王のモスク」を着工する。これはサファヴィー朝の建築群の中でも代表的なものの一つである。残念ながら、王は1630年の完成を見ずに他界した。

王の広場から見ると、王のモスクは45度斜めに構えるように建っている。王の広場の南側を見下ろすように高さ50mの2本のミナレット(光塔)をもち、さらにそれを越える高さの大ドームを抱く、壮大な建築である。

大ドームの前には緑豊かな中庭がある。ちなみにこの長方形の中庭は、短・長辺が3と4、対角線が5というピタゴラスの直角三角形を合わせた形とな

っている。

ペルシャ建築において、緑の溢れる中庭は楽園を表象し、モスクの壁面を飾る植物の文様は不死の植物を象徴する。王のモスクもまた、地上の楽園が実現したものだと考えても良さそうだ。

## 都市公園のさきがけ

アッパース1世は王の広場の西側に、ザーヤンデルード川に至る幅50m、長さ1,600mの壮麗な並木道、チャハル・バークを建造した。これはペルシャ語で「四つの庭」を意味する。

植栽に利用されたのはプラタナス、ポプラ、ニレ類などの落葉広葉樹が中心であった。これは夏に

緑陰を与え、冬には陽光を遮らないための賢明な樹種選択といえる。道路の中央には切り石で縁取られた疎水が造られた。大通り沿いには60以上の園地が造られ、池や庭園、花壇などが整備された。園地の総面積は145haにも及んだという。

当時の園地を偲ぶには、ハシュト・ベヘシュト(八菜園)と呼ばれる園地を訪れてみるとよいだろう。1670年、シャー・スレイマーンによって建造されたもので、最近修復されて公開されている。

またチャハル・バーク大通り沿いの園地には市民が自由に出入りできるものが多く、近代的な「都市公園」のさきがけといえよう。ヨーロッパの都市で公園が一般化するのには18世紀以降であるから、イスフ



広々とした王の広場と中央部の噴水

ファハーンの公園は、現在に至る世界最古の都市公園と言えるかもしれない。

## 「世界の半分」の繁栄

イスファハーンの繁栄は、サファヴィー朝が滅亡する1736年までの130年間続いた。最盛期の人口は約50万人といわれ、当時の世界で同規模の都市はロンドン、パリ、江戸、北京、イスタンブールくらいだったという。

この時代のイスファハーンの様子を伝えるのが、フランス人宝石商シャルダンの旅行記『ペルシャ紀行』である。彼は17世紀後半、イスファハーンを二度訪れ、3年ほど滞在している。それによれば、「イスファハーンは世界のあらゆる宗教を信仰する住民がおり、世界中から来た貿易商が集まり、人々は豊富

で贅沢な生活をし、街は美しさや豊かさの点で他に類をみないような場所である」と記している。「イスファハーンは世界の半分」という有名な言葉も、この時期のイスファハーンを形容したものだ。

イスファハーンの繁栄の基本には交易を可能とする場所、とりわけ「市」があったことは間違いない。中東イスラーム世界における市は、農村と遊牧・牧畜社会の間を結ぶ交易の場所として発展したという。イスファハーンはザーヤンデルード川沿いの豊かな農村をもち、少し離れると遊牧・牧畜が盛んな乾燥地域が広がる。こうした立地条件から市は賑わい、常設化されていったと思われる。

イスファハーンでは、8世紀にはイスラーム礼拝の金曜モスクが建てられ、10世紀までに、そこに繋が

る路地の両側がバザールとして機能していた。王の広場や宮殿が付け加わるのは17世紀初頭のことだが、王の広場を取り囲むように新たなバザールが形成され、それが古くからのバザールと合体してより大きな商業空間となっていた。こうして形成された交易空間が「世界の半分」といわれたイスファハーンの賑わいを演出した。

### コーランにおける楽園

当時のサファヴィー朝ペルシャはイスラームを基本原理とする社会だった。イスラームには預言者ムハンマドに啓示された神の言葉を集めた『コーラン』

があり、これは信者がいかに生きるべきかを示している。

『コーラン』には篤信者の至福を示す概念として、日陰と水を持つ庭園が繰り返し引用される。また「楽園の四大河」という言葉もコーランに登場し、「4つの河のうちの一つは水、一つは乳、一つは葡萄酒、一つは蜂蜜が流れる」と記されている。チャハル・バークはこの4つの河によって分割された「四分庭園」なのである。事実、イスファハーンのチャハル・バークは木々が涼しげな緑陰を造り、園地の中央には疎水が設けられ、川から引かれた水が流れていた。

こうしてみると、イスファハーンは『コーラン』に示

から来たのだろうか。アッバース1世によって築かれたチャハル・バーク大通りがザーヤンデ・ルード川を渡る場所に、王は長さ296mのアッラーヴェルディ・ハーン橋、通称33アーチ橋と呼ばれる橋を架けた。建造した將軍名が冠せられている。幅は13.5mあり、中央部を車馬が、両側のアーケード部を歩行者が通るように設計されている。

33アーチ橋から約2km下流には、1660年にアッバース2世が建造したハージュ橋がある。この橋はザーヤンデ・ルード川の水を堰きとめて、イスファハーン市内に張りめぐらせた水路網に水を引き込む役割も果たした。ダムと橋の両方の機能を備えた構造物

で、いわば楽園を潤す水の源となった橋である。

なお、ハージュ橋からさらに下流には、これら2本の橋よりさらに古い時代のシャハレスタン橋がある。この橋はササン朝ペルシャ時代に建造されたという。見かけも他の二橋に比べて重厚な感じがする。

### イスファハーンとダム建設

古都イスファハーンの成り立ちと水の関係について、もう一つ興味深い説を紹介しよう。

シャルダンの『ペルシャ紀行』には、「ザーヤンデ・ルード川の水量をさらに増すために、山一つ隔てた西側を流れるカルン川から水を引く計画が進めら



- 1 イスファハーンの地図
- 2 夕刻の王の広場
- 3 ハシュト・ベヘシュト(八菜園)と呼ばれる公園の緑道
- 4 緑あふれる市内の公園
- 5 体力増進用の健康器具が据えられている公園
- 6 公園のメンテナンス
- 7 バザールのお土産品屋
- 8 金曜モスクに繋がる賑やかなバザール
- 9 王のモスク正面の青い装飾
- 10 唐草と鳥をモチーフとした装飾模様
- 11 美しく軽やかなシルエットを持つ33アーチ橋
- 12 川をせき止めてダムを兼ねるといわれるハージュ橋
- 13 ササン朝ペルシャの建造された重厚なシャハレスタン橋
- 14 日本の技術で作られたクーランギ・ダム

された楽園のイメージを地上で実現しようとしたものであることが解る。

### 建築に現れた楽園願望

楽園への願望が込められたのは庭園ばかりではない。建築や装飾にもそれが読み取れる。イスファハーンでは青色が印象的に使われている。青は水や空の色であり、青色に光るタイルを焼成するには、コバルトやトルコ石の粉が使われたという。

また壁面の装飾には、独特の「つる草」模様が使われている。この文様は、古くはササン朝ペルシャに起源をもち、後に世界各地に広まったという説があ

り、日本の唐草模様もその一つだという。モスクの壁面には、このつる草文様が広く使われている。広大な壁面を埋めるために、渦巻きを繰り返す文様が生み出され、緑に覆われた楽園の風景が演出された。

このつる草の文様は絨毯や更紗などにも採用されている。ペルシャ絨毯に使われるメダイオンという系統の模様(中央にメダルのような丸い文様があり周囲につる草があしらわれたもの)は、イスファハーンの王のモスクのドーム内側の文様から取られたものという。

### 古都を飾る美しい橋の秘密

ところで、イスファハーンの庭園を潤す水はどこ

れていた」と記されている。どの山のどの辺りかは実証されていないようだが、「水源の泉に高さ80mのダムを造り、水位を上げ、山を3kmにわたって切り開き、ザーヤンデ・ルード川に流し込むという壮大な事業」と書いている。その事業はアッバース1世によって開始され、その死後はその子、アッバース2世によって引き継がれたものの、当時としてはあまりの難工事であったため、完成されることはなかった。

しかし、カルン川水系の水をダムで貯え、約2.8kmのトンネルでザーヤンデ・ルード川に水を引く工事は、アッバース1世から400年近くも後、日本の建設会社によって完成された。アッバース1世の果たせなかつ

た「楽園への途切れることのない水供給」という夢を、日本の土木技術が叶えた。以降も、カルン川の水資源開発が行われており、ダム建設などに日本の建設コンサルタント会社も携わっている。水がこの国の発展には欠かせない。

#### <参考文献>

- 1) ジョン・ブルックス著 神谷武夫訳『楽園のデザイン』鹿島出版会 1989年
- 2) NHKアジア古都物語プロジェクト「イスファハーン・オアシスの夢」日本放送出版協会 2000年 同所収 深見奈緒子「よみがえるイスファハーン」
- 3) 坂本勉「地域社会と市場」(佐藤次高・岸本美結編「市場の地域史」山川出版社)
- 4) Sadeghian Mohammad Taghi「イランの都市緑化に関する研究—イスファハーン市の造園の歴史的考察—」日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) 1993年9月

#### <提供>

- P51、②~⑬ 著者 ① 出典:ブルックス著「楽園のデザイン」をもとに修正
- ⑭ 熊谷組